

溺愛サレ男～妻に不倫され全てを失った平凡おじさんは
年下イケメン御曹司に溺愛される～

だんっ!!♡♡だんっ!!♡♡だんっ!!♡♡だんっ!!♡♡だ
んっ!!♡♡だんっ!!♡♡だんっ!!♡♡だんっ!!♡♡

「あゝっ!♡ あんっ!!♡ らめっ♡ やあっ!♡ んっ♡ んうっ♡
……だめえっ♡ あっ、ん!♡ らめっ♡♡♡♡♡」

一生縁などないはずの、豪華極なスイートルーム。脳を白く塗り潰すような衝撃。無様に声を上げ、背中がのけぞる。

目の前で、滴る汗も構わずに懸命に腰を打ちつけているのは、元取引先のエリート、^{さえきれん}冴木蓮さんだ。

ああ、どうして私は、冴木さんに抱かれることになったんだっけ……。

※

「……ウイスキーを、ロックをお願いします」

初めて足を踏み入れた小洒落たバー。私、^{よしだ りんたろう}吉田凜太郎は、

場違いな空間への落ち着かない気持ちを抑えて注文し、深く項垂れた。

「お待たせいたしました。ウイスキー、ロックでございます」
「……ありがとうございます」

差し出された琥珀色の水面を覗き込む。そこに映っていたのは、中肉中背で艶のない黒髪、そして、あまりにもやつれ果てた男の顔。思わずため息をついた。

……私は、本当につまらない人間だ。

厳格な両親のもと、『常に男らしくあれ』と今の時代と逆行するような教育方針で育てられた。

弱音を吐かず、ただ真面目に。親の期待に応え続け、それなりの大企業に就職し、家庭に入りたいという同僚女性と結婚。それなりに 36 年生きてきた。

なのに、妻の不倫が発覚した。あろうことか私の上司と。

泥沼の末に離婚。裏切った男と働き続ける屈辱に耐えられず、逃げるように会社を辞めた。

絶望する私に、親が投げつけたのは『恥晒し』という言葉だった。積み上げてきたプライドも、人生の指針も、すべてが音を立てて崩れ去った。

元妻の名残がこびりついたマンションに居たくなくて、私は夜の街へ這い出した。普段は外で飲むことなどないが、何故か吸い寄せられるように、このバーの重厚な扉を押し開けたんだ。

もう、酔っ払って、何もかも忘れてしまいたい。

震える指でグラスに手を伸ばそうとした、その時だった。

「吉田さん？……吉田さんじゃないですか」

「え……っ。もしかして……冴木、さん……？」

不意に横から響いた、熟成したワインのように甘くて、それでいて芯のある低い声。ハッとして顔を上げると、そこに

はかつての取引相手だった冴木蓮さんが、驚いたように、けれどどこか嬉しそうな瞳でこちらを見つめていた。

「退職のご挨拶ぶりですね。……もしよければお隣よろしいですか？」

「あ、はい。もちろん……」

動揺して声を震わせる私の返事を待たず、冴木さんは滑らかな動作で隣のバースツールに腰を下ろした。

冴木蓮。

弱冠 28 歳という若さにして異例の業績を叩き出していたキレ者だ。彫刻のように整った美しい顔立ちに、夜の闇を溶かしたような艶のある黒髪。190cm 近い長身と、一分の隙もない凜とした佇まいに圧倒される。

それでいて、私のような平凡で冴えない男にも常に穏やかな物腰で接してくれる彼は、仕事のしやすさも含めて、私にとっては眩しすぎる憧れの存在だった。

「吉田さんは、なにを飲まれているんですか？」

「ウイスキーのロックです。……恥ずかしながら、こういう場所には慣れていなくて、手っ取り早く酔えるものを、と」

自嘲気味に笑う私を、冴木さんは形の良い眉を少しだけ潜めて見つめた。

「そうなんですね。吉田さん、もしよければ僕のおすすめを注文してもいいですか？ 一杯奢りますよ」

「そんな、悪いです……」

「お気になさらずに。……マスター、マティーニを。それから彼には、アプリコットフィズを」

澁みのない鮮やかな注文に気圧され、そのまま流されてしまった。彼の方が一回り近く年下のはずなのに、その堂々とした振る舞いに断りきれなかった自分が、なんだか無性に情けない。

やがて私の前に置かれたのは、中年の私には眩しいほど愛らしいアプリコット色の泡が、シュワシュワと軽やかに弾けるグラスだった。

「綺麗な色……」

「アプリコットフィズっていうんです。度数は低いので手っ取り早く酔うことはできませんが……折角僕と飲むなら、楽しく酔ってほしいと思ったので」

「ありがとうございます」

こんな私におよそ似つかわしくない、愛らしいカクテル。けれど、冴木さんが私のために選んでくれたという事実が、冷え切った心にじんわりと温かく染み渡った。

「乾杯しませんか？……再会した、僕らの『運命』に」

冴木さんはそう言って、冷えたマティーニのグラスを傾けながら、熱っぽい瞳で私をじっと見つめた。

普通の人ならキザすぎて見ていられないような仕草も、彼がやれば映画のワンシーンのようにスマートで格好良い。でも、人生のどん底にいるおじさんに『運命』なんて、いくらなんでも物好きがすぎる。

「ふふっ。冴木さんって、面白い人なんですね」

「……僕は本気ですよ？」

私の言葉に、冴木さんはむうっと、少し拗ねたような表情を見せた。完璧だと思っていた彼の、子供っぽい一面。それが不覚にも、かわいいと思ってしまった。

「……っ、ふふ。すみません、笑うつもりじゃなかったんです。でも、嬉しいです。……では、私たちの『運命』に」

カチリ、と繊細なグラスが触れ合う音が静かな店内に響いた。

※

「っ、グスツ……。だからっ、会社にいたくなくて……っ、辞めちゃったんです。冴木さんにもご迷惑おかけして、すみません～～っ!!」

1時間後。私は見事に酔い潰れ、無様に泣きじゃくりながら、これまでの惨めな経緯をすべて冴木さんにぶちまけてしまっていた。

元々お酒に弱いのに、あまりのおいしさにあの甘いカクテルをおかわりしてしまったのが運の尽きだ。

「……あ、ごめん、なさい。冴木さんに、こんなみっともないこと……冴木、さん？」

ハッと我に返り、隣を仰ぎ見る。すると、そこには見たこともないような表情を浮かべた冴木さんがいた。眉間に深い皺を刻み、怒りを必死に押し殺しているようでありながら、どういうわけか、その口元は歓喜に歪んでいる。

「……すみません、吉田さん」

「え……？どうして、冴木さんが謝るんですか。こんな、つまらない話を無理やり聞かせたのは、私なのに……」

「あなたが裏切られ、とても辛い状況だというのに……。不謹慎にも私は……いま、猛烈に嬉しいんです」

「……え？」

どうことだろう。熱を帯びた彼の言葉が、酔った頭にはうまく入ってこない。

「だって……今、吉田さんは誰のものでもないということですよね？ 私がアプローチしても、何の問題もないということですよね？」

するり、と私の手に冴木さんの大きな手が重なった。指の隙間に彼の長く節立った指が躊躇なく入り込み、がっしりと深く絡め取られる。

その熱い密着感に卑猥な光景を連想してしまい、私は抗えず背筋を震わせた。

「あは……冴木さん、酔っていますか？ あなたの隣にいるのは、綺麗な女性じゃないんですよ。ただの、冴えないおじさんで……」

「知っていますよ。吉田凜太郎さん。36歳。取引先の元担当者で、私の……ずっと前からの、片想いの相手です」

「かた、おもい……？」

片想い。

この完璧な男の唇からは、およそ似つかわしくない言葉

がこぼれ落ち、私は驚愕に目を見開いた。しかも、対象が……私？

「ずっと、お慕いしていました……。ですが、左手の薬指に指輪があったから、諦めて良き仕事相手であることに徹していたんです。でも、もう……その必要もありませんね」
「っ、ひゃ……っ!!」

不意に両手を包み込まれ、至近距離から熱烈に射抜かれる。

「同性が恋愛対象ではないことは、百も承知です。ですが、今夜だけでいい。私に吉田さん……いいえ、凜太郎さんの時間をくださいませんか」
「そんな……っ」

断らなければならない。頭の中で警鐘が鳴り響いている。

でも……。

この誘いを断ったところで私はどうなる？ 待っているのは、

何も変わらない惨めなひとりぼっちの日々だけだ。

つまらない男、吉田凜太郎は離婚を経て一度死んだのだ。どうせ死に体の人生ならば。私を求めてくれるこの男の手をとり、奈落の底まで連れ去られてもいいのではないか。

「……やっぱり無理ですよ。今のは、忘れてください」

諦めに揺れる冴木さんの瞳に、私は決心した。震える指先で、彼の熱い掌を弱々しく……けれど、確かな意志を込めて強く握り返した。

「凜太郎さん……？」

「いいです……あげます。私のぜんぶ。あなたに」

※

ちゅく……♡んむ……♡ちゅう……っ♡♡♡

「ああ、凜太郎さん……っ。あなたとこうして、キスできるなんて夢みたいだ……っ!」

「はあ……っ、あ♡ん……っ、ふ……っ♡」

あれよあれよとタクシーに押し込められ、揺られるままに辿り着いたのは、自分の人生には一生縁がないと思っていた最高級ホテルのスイートルームだった。

宝石を撒き散らしたような夜景を楽しむ余裕もなく、呆然と立ち尽くす私を、冴木さんはキングサイズのベッドへと優しく押し倒した。口内の粘膜を執拗に愛撫するようなキスに、頭の芯がとろとろに溶かされ、何も考えられなくなっていく。

こんなキスをするのは、いつ以来だろう。元妻とは離婚前からセックスレスだった。そもそも、これほど脳が溶けるようなキス自体、36年の人生で初めてかもしれない。

「……凜太郎さん。服を脱がせてもいいですか？」

「や……っ!恥ずかしい、です……」

あまりに直球な申し出に、私はまるで生娘のように首を振って拒んだ。だが、冴木さんは私の耳たぶを甘噛みし、逃がさないように抱きしめる腕に力を込める。

「どうして？僕にぜんぶあげるって言ったのは凜太郎さんですよ？」

「うっ……そうですけど。でも……こんな、だらしない身体を冴木さんに曝け出すのは……嫌なんですっ！」

完璧な美しさを誇る彼の前で、締めりのない身体を晒すのが、恐ろしくて仕方がなかった。

「大丈夫。僕を信じて。あなたの全部を、見たいんです。……見せてください」

問答無用と言わんばかりに、再び深いキスで唇を塞がれる。熱い舌を絡め取られながら、性急な手つきでシャツのボタンを外され、あっという間に一糸纏わぬ無防備な姿を晒してしまった。

「ほら……やっぱ、かわいい」

ちゅ♡ちゅ♡……ちゅう♡ちゅう……っ♡♡♡

「ひゃっ……!? あゝ、冴木、さん……っ♡」

冴木さんは、私のたるんだ身体を宝物のようにうっとりと眺めたかと思うと、次の瞬間、飢えた獣のように私の乳首へとむしゃぶりついた。

今まで誰にも触れられたことのない場所。乳輪の縁をなぞるように舌先で丹念に舐めまわされ、じつくりと熱く吸い上げられる。

逃げ場のない快感に背中が大きいのけぞり、自分でも信じられないような、あられもない声が漏れ出した。

「あ、ああ……っ♡」

「凜太郎さん。おっばい、気持ちいいんですね。……本当に今まで女性とセックスしていたんですか？だとしたら、あまりに可哀想だ」

「な……っ、ひどい……っ!」

恥辱に顔を赤くする私を見て、冴木さんは私を諭すように優しく囁く。

「すみません。怒らないで……。可哀想なのは、あなたです。

だって……」

「!?!……ひゃあうっ?!?♡♡」

冴木さんはいきなり僕のペニスを握り込んでしゅこ♡しゅこ♡とゆっくりしごき始めた。

「おっぱい舐められて、かわいい声で鳴きながら一生懸命おちんちんを勃たせて……。凜太郎さん、あなたは愛される才能しかない。それなのに、無理やり男の役割を押し付けられていたなんて、本当に不憫でならない」

「あ、っ♡ しこ、しこ……っ、やめて……っ、両方……っ、同時に……やめてえっ♡」

しゅこ♡しゅこ♡しゅこ♡にちゃ♡ぬちゅ♡

じゅぷっ、じゅるうううううっ!!! ♡♡♡

乳首とペニス。上下から同時に押し寄せる快楽の濁流に、私の理性はあっけなく決壊した。

「や……あ!!でちゃい、ます!!やめて。やめてえ♡♡」

「かわいー。いいですよ、出して。……凜太郎さんがイくところ、全部僕に見せて」

「ああああっ♡……ひ、あ、いゝぐうううっ!!!♡♡♡」

どぶ♡……どびゅるるるっ!!!♡♡♡

未体験の乳首への刺激と、久方ぶりのペニスへの強烈な快感。私は腰をへこへこと跳ねさせながら、冴木さんの美しい手の中にすべてを吐き出した。

「はあ……っ、は、うゝ……♡」

「ああ、すごくかわいい……凜太郎さん。上手にイけて偉いです」

ぼんやりとした意識の中に、冴木さんの熱を帯びた声が響く。

「わたし、上手……でした？」

「ええ……とっても。あなたの痴態を見ただけで、ほら……こんなに」

「あ……っ♡」

手を取られ、導かれた先。服越しでもわかる、凶暴なまでに熱く反り立った冴木さんのペニス。

自分のせいで、この男がこれほどまでに昂ぶっている。その確かな事実、私の胸の奥から熱いものが一気に込み上げてきた。

「ぐすっ……うう……っ」

「え……っ!? す、すみません! いきなりこんなことしてしまって、怖かったですよね……っ」

さっきまでの余裕に満ちた表情はどこへやら、冴木さんは狼狽え、焦ったように私の顔を覗き込んできた。

「違うんです……っ、ぐすっ。妻と離婚するとき……『あんたのセックスは下手くそだ』ってなじられて……。それが、ずっと怖くて、自信が持てなくて……っ。でも、冴木さんが褒めてくれて……。こんなに勃起してくれたのが、本当に、嬉しくて……泣いちゃったんです……っ♡」

「……………っ!!」

私の告白を聞いた瞬間、冴木さんは絶句した。

美しい瞳に私を傷つけた元妻への猛烈な怒りと、目の前で泣きじゃくる私への狂おしいほどの愛情が入り混じり、激しく火花を散らすようだった。

「凜太郎さん……本当に、貴方は……っ!」

「ああ……っ♡♡♡」

強く抱きしめられて、再びキスの雨が降る。舌が絡んで、吸って唇を舐めて。幸せに包まれる。

「凜太郎さん……あなたの中に入りたい。セックス、させてください」

「私も……あなたとなら、ひとつになってみたい。でも……うまくできなかったら、ごめんなさい……っ」

消え入りそうな声での私の謝罪に、冴木さんはどこまでも深く、慈しむように目を細めた。

「何を言っているんですか。セックスは、ふたりで行うもので

すよ。もし失敗したとしても、何度だってやり直せばいい。
……一緒に、気持ちよくなりましょう」
「はい……っ！」

その温かな言葉が、私の心に残っていた最後の防波堤を、
音を立てて崩した。

そこからは怒涛で、冴木さんは固く閉ざされた私の後孔に
ぬるりとした潤滑剤をたっぷりと塗り込んだ。長く節立った指
が窄まりのフチを愛おしむようにくるくると周遊し、やがて第
一関節までゆっくり潜り込んできた。

つぶ……♡ぐち……っ♡

「ん……っ、あゝ……っ！」

初めて経験する羞恥と異物感に、いやでも身体が強張る。
そんな私の身体を、彼は大きな掌で宥めるように、何度も何
度も優しく撫でさすった。

「力を抜いて……深呼吸ですよ」

時間をかけて、1本の指が根元まで深々と沈み込む。やがて窄まりが緩んだ隙を突いて、指が2本に増えた。

「はあ……っ!んん` ……っ、あ……っ」

みちみちと内壁が押し広げられ、異物感はいつしかジンジンとした切ない熱へと変わっていく。空調の効いた豪華なスイートルームのはずなのに、重なり合う2人の肌は既にひどく汗ばんでいた。

冴木さんは私の反応をじっと見つめながら、何かを探り当てるように指先をクイッと上向きに曲げた。お腹の側を内側からなぞり、そこにある『何か』を捉え、強く弾くように押し上げた。

「……っ!? ひゃ、あ` ああああっ!!♡♡」

その瞬間、脳髄まで突き抜けるような未体験の衝撃が私を襲う。膝ががくがくと震え、視界がチカチカと火花を散らす。

先ほど射精したばかりのペニスが、再びじりじりと熱く反

り立ち、先走りが溢れ出した。

「……見つけました。ここが、凜太郎さんの『愛されスイッチ』ですね」

確信に満ちた声とともに、トントンとリズムカルにそこを叩かれる。そのたびに腰が勝手に跳ね、私はあられもない声を上げてのけぞった。

「や……め……っ。そこ、おかしく、なっちゃう……っ♡♡お、おしっこ出ちゃう……っ!!」

「凜太郎さんの口から、そんな単語が聞けるなんて……!!ふふ。おしっこ出すところは、また今度ゆっくり見せてくださいね」

冴木さんは不穏な言葉を残しつつ、身に纏っていた衣服をすべて脱ぎ捨てた。そして指に代わって、ゴムを装着した熱く巨大なペニスを、ひくつくアナルに押し当てた。

「……ゆっくり挿れますから。凜太郎さんのぜんぶ、僕にください」